

スペシャリストの素顔

医療現場ではさまざまな職種 の職員が働いています。
今回はその中から理学療法士と臨床研究 コーディネーターをご紹介します。



理学療法士(PT)の役割は?

リハビリテーション(以下、リハビリ)の専門職には、社会への適応を目指した身体と心の両方のリハビリを担う作業療法士(OT)、話す・聞く、食べる・飲み込むといった機能回復を担う言語聴覚士(ST)、そして理学療法士(PT)の3職種があります。

理学療法士は立つ・座る・歩くといった基本動作の回復を担う専門職で、一般的に整形外科の術後リハビリや脳卒中などのリハビリを担当します。ただ、もっと奥は深く、例えば、歩く動作に必要なのは脚力だけではなく、さまざまな身体機能も使っているように、階段昇降や寝返りなども基本運動であり全身応用運動でもあります。このような運動による身体能力の活性化は、作業療法士や言語聴覚士がADL(日常生活動作)に関わる訓練を行う際のひとつの土台になると思います。患者さんのQOL(生活の質)の向上につながる、最も大切な基礎を担っているのが理学療法士なのです。

神経・筋難病に対するリハビリとは?

箱根病院は長い歴史を経て、筋ジストロフィーや筋萎縮性側索硬化症(ALS:神経細胞が侵され思うように筋肉を動かせなくなる病気)といった神経・筋難病全般に対応している特徴的な病院なので、神経・筋難病に即したリハビリも行っています。例えば、神経・筋



サイボーグ型ロボットHALを使った歩行訓練

難病の患者さんが肺炎を併発してしまうと、咳ができるか、痰(たん)が上手く出せるかということが、その後の人生に大きく関わることがあります。そのため、機器を使った咳の練習など



箱根病院
高橋 宏幸さん
理学療法士

理学療法士 (PT)

リハビリテーションに関わる3職種のひとつで、病気・けが・高齢・障害などで運動機能が低下した人に対し理学療法を行う国家資格。運動のほか、電気刺激・マッサージ・温熱などの療法も用いて基本的動作能力の回復を図る。

も行います。また、どれだけ空気を肺に取り込めるかが予後に大きく影響してくるので、呼吸の練習などもリハビリの一環です。

健常者が意識せずに行っている動作でも、神経・筋難病の方にとっては人生を大きく左右することがあり、呼吸療法はとて大切なリハビリのひとつなのです。



「違う世界に浸れる時間も大切」と語る高橋さんの趣味は読書。浅田次郎が好きで、涙を流したこともあったか

在宅の患者さん・ご家族への対応は?

神経・筋難病の場合は日々大きな変化が起こることもあり、リハビリスタッフのみならず医師・看護師などを含めて毎朝、まるであいさつをするように患者さんの情報を自然と交換しています。また、箱根病院には訪問看護部門もあるので積極的に地域に出かけています。在宅の難病患者さん向けの相談会にも院長・看護師・ソーシャルワーカーなどと一緒に出かけ、治療はもちろん経済的な不安による心の問題まで、各職種が専門性を生かしながら孤立しがちなご家族の精神的不安の解消にも努めています。さらに、地域の訪問看護ステーションとも情報を共有するなど、文字通りセーフティネット(P09-10参照)の一翼を担っているのです。

NHOには特徴的な医療を提供している病院が多く、それだけにさまざまな病気の患者さんやご家族と接する機会があります。各分野のスペシャリストになることを目標にしつつも、多くの人のお役に立てるよう思慮熟考できるジェネラリスト(広範な知識を持つ人)を目指しています。

臨床研究 コーディネーター (CRC)

名古屋医療センター
中村 和美さん
副看護師長



看護師・薬剤師・臨床検査技師などとしての豊富な現場経験を生かしながら臨床研究の関係者を調整・支援し、倫理性と科学性に基づいた臨床研究を実現する専門スタッフ。Clinical Research Coordinatorの頭文字からCRCとも呼ばれる。

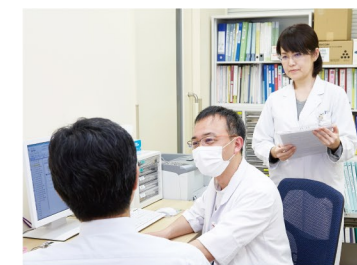
臨床研究コーディネーターとは?

臨床研究コーディネーター(以下、CRC)は、臨床研究(治験も含む)に参加していただく患者さんと医療スタッフ(医師や看護師など)の双方を調整・支援することで、臨床研究が安全かつスムーズに行われるための業務を担う専門スタッフです。患者さんに対しては研究内容を分かりやすく説明し、医師の診察の際には同席して説明を補足したりするなど、患者さんの不安が最小限になるように、そして信頼される存在となれるように努めています。

同時に、患者さんへの説明資料や副作用などに関する報告書の作成、データの信頼性を高めるための記録の整備や保管、治験を依頼した企業や研究の代表者との調整など、臨床研究の開始前から終了後まで一貫した幅広い業務・役割を担っています。

CRCとして心がけていることは?

臨床研究に参加してくれる患者さんやご家族と接する場合に常に意識しているのは、「もし自分や自分の家族が参加するとしたら」という視点です。患者さんに研究につ



同席して患者さんの理解を見極めることも大切

いて理解をしてもらうことはもちろん、患者さんがお持ちの症状や背景についても十分に理解しつつ、患者さんの意見を尊重し



ながら研究参加の意思を確認するように努めています。また医療スタッフに対しては自身の看護師経験などを生かした、通常の診療業務と研究に関連する業務との違いを理解した上でのサポートを心がけています。

名古屋医療センターでは血液の病気や子どもの希少疾患に対する初期段階の治験も多く、有効性・安全性に関する情報が少ない段階での治験になるので、患者さんやご家族に対するより慎重な対応が必要になります。当然、予期できなかったような副作用などが起きた場合は研究依頼者にもすぐに報告し、必要に応じて同じ治験に参加している他の医療機関に注意喚起してもらうなど安全性の向上に努めています。同時に、臨床研究の国内の動向(規制など)にアンテナを張り、最新治療について勉強を怠らないようにして

います。

看護師としても経験豊富な中村さんの息抜きは、わんこ専用アプリ「クンカブル」への愛犬写真アップ



読者の皆さんに伝えたいことは?

印象的だったのは「病気の自分でも人の役に立ててうれしい」という治験参加者のお言葉でした。CRCとして新薬開発の初期段階から国に承認されて発売されるまで関わることも多く、「この薬が未来の患者さんの役に立つ」という想いを患者さんと共有できることは、CRCとしての何よりのやりがいです。

臨床研究への参加は、もしかするとマイナスのイメージを持っている方もいるかもしれませんが、今では法の整備も進んでおり、患者さんの安全性を第一に考えた体制も専門スタッフも整ってきています。最新の医療をより早く皆さんに提供するためには患者さんの協力が欠かせないのです。